

幡多希望の家

◆◆ No.17 ◆◆



医療型障害児入所施設
療養介護事業
幡多希望の家

TEL (0880) 66-2212 FAX (0880) 66-2215
HP ▶ <http://www.hatakibou.jp/>
Mail ▶ hataki01@mb.gallery.ne.jp
＜発行所＞〒788-0782 高知県宿毛市平田町中山867番地
＜発行日＞2021年 1月26日

理事長あいさつ

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

コロナ禍の中ではありますが、皆様お揃いで新年を迎えることとお喜び申し上げます。

例年と違い、昨年は世界各地で蔓延する新型コロナウイルス感染症の流行により、国においては、緊急事態宣言が発出され全国民が自粛生活を余儀なくされ、私達の生活は一変しました。

「幡多希望の家」でも利用者の方々やご家族、職員、地域の方々の中にも定着していた「幡多希望の家祭」の中止をはじめ、利用者の方々と培ってきた行事などを見直すこととなりました上に、何よりも心を痛めたのは感染対策として、ご家族との面会制限を加えざるを得なかったことでございます。

このようなコロナ禍にあり、職員の英知と工夫によって優しい眼差し溢れる笑顔を求めて、利用者の方々と歩み続けた一年でありました。おかげさまで、今日まで誰一人感染者を出すことなく無事施設運営に至っております。

非常事態の中での対応にご理解ご協力下さった皆様に心から感謝申し上げます。

「幡多福祉会」では、昨年4月1日付で河原常務理事、島田施設長が就任し、土佐希望の家の全面的な協力のもと、24時間365日の医療体制の確保に、幡多けんみん病院をはじめ、地元医師会のご協力を頂いて参りました。

また、人口減少社会の中で、地域とともに歩み地域に



理事長 小椋 茂昭

必要とされる福祉施設として、近い将来の移転新築等も視野に、法人運営の健全化に向けて運営検討委員会を設置し、様々ご検討いただいております。近々適切なご助言をいただき新年度からの事業運営に反映する予定としてまいります。

コロナ禍の中でのこの一年「人とは」「福祉とは」「障害とは」「医療とは」「療育とは」などなど、広い視野に立って自分たちの仕事を見つめ直す事の大切さを考えさせられた一年であったと思います。

新年も引き続きこの課題に挑戦し続けなければなりません。

コロナ禍の一日も早い終息と皆様のご多幸をお祈りして新年のご挨拶いたします。

さくらんぼのクリスマス会



コロナ禍だったので、ささやかなクリスマス会を行いました。

花壇の手入れ

今も時折来所して下さる元保護者さん。
当施設の入りが寂しいと、自宅から可愛らしいお花たちを植えて来てくれました。
こういった方々に日々支えられていることを痛感しました。



ラッシュバイ・パチコ様（宿毛市）より寄付金をいただきました。

今年度もラッシュバイ・パチコ様より寄付金をいただきました。
ラッシュバイ・パチコ様は平成12年から約20年もの間、毎年寄付を下さっています。
写真は当施設の理事長が感謝状を贈った所です。
ラッシュバイ・パチコ様ありがとうございます。



編集後記

皆様あけましておめでとうございます。
昨年は、年明け間もない頃から新型コロナウイルス感染症が発生し始め、一年中コロナの動向を気にする一年だったかと思っております。
今年も年明けから都心では緊急事態宣言が出されるなど、大変なスタートとなりました。
気軽に外出等が出来ないと思いますが、家庭でできるストレス発散法などで、適度にストレスを軽減していきたいものですね。

職員コラム ～あんなこと、こんなこと～

私が小学生の時、どうやって自分の名前が付けられたのか、母に聞いた時、姓名判断で見てもらったと聞いていた。
しかし、適齢期になっても結婚しない私に母が・・・私の名前は病気の父が、父親がいなくても一人で生きていけるようにつけられたから強すぎたのかもしれないと言った。
実際、私の名前は読みにくく、ちゃんと呼ばれたことがなく、小さい時はあまり好きではなく残念に思っていた。
無事に結婚でき(笑)自分に子供ができた時、自分のちよつとしたトラウマを入れて、呼びやすく読まれやすく書きやすい二文字を絶対にと名付けたが、根底には愛しい我が子の幸せを願っての名前で、父もそうだったのかなあとちよつと思ふ。

病棟 看護師

『お市の方』 ～施設長便り～

【聖書：ヨハネ 19章25～27節】：さて、イエスの十字架のそばには、イエスの母と、母の姉妹と、クロパの妻マリヤと、マグダラのマリヤとが、たたずんでいた。イエスは、その母と愛弟子とがそばに立っているのをごらんになって、母にいわれた、「婦人よ、ごらんなさい。これはあなたの子です」。それからこの弟子に言われた、「ごらんなさい。これはあなたの母です」。

皆様は石井十次という人をご存知でしょうか。

彼は江戸時代末期に日向高鍋藩士の子として生まれ、岡山で医学を学び医師となりました。しかし、明治20年、22歳の時、ある貧しい母子との出会いをきっかけに医師を辞め、児童救済の事業を始めました。岡山市で孤児院を設立し、一時は千二百名もの孤児を預かっていました。石井十次は日本の福祉事業の先駆者であり「孤児の父」と呼ばれました。彼は奥さんとともに孤児たちに大きな愛情を注ぎ、彼らからは「石井のお父さん、お母さん」と呼ばれていました。「お父さん」「お母さん」という呼び名は、子どもが最も信頼し愛情を感じる人への呼称です。



岡山孤児院と石井十次

さて「お市の方」と聞けば、多くの人は織田信長の妹を思い浮かべるのではないでしょう。絶世の美女で、その数奇な運命は幾つかのエピソードで戦国時代を飾っています。ところで私はもう一人の「お市の方」を知っています。そして私にとってはそちらがより重要な女性です。なぜなら、その「お市の方」は私の母方祖母であるからです。父方祖母は私の誕

「お市さん」の武勇伝として、大阪の叔母の9ヶ月の長女が細菌性の髄膜炎で亡くなった時の話があります。付き添いに来ていた祖母は火葬が耐えられず、孫の亡骸を背負い、列車や連絡船を乗り継いで、28時間をかけて田舎まで連れ帰り埋葬しました。祖母は他の人から離れ、食事も取らずに、デッキなどでずっと立ちっぱなしであったとのことでした。

その祖母が亡くなったのは、私が大学卒業直前のことでした。祖母は、脳梗塞と肺炎で大阪の病院に入院していました。私が見舞った時、酸素テントの中で、祖母は笑顔を見せて、弱いながらも私の手を握り返してくれました。そして、テントの中から頷いて私を見送ってくれたのが、祖母の最後の姿でした。私は今でもその時の祖母の笑顔と手の温もりを憶えています。

祖母の葬儀の場で、私は重大な事実を初めて知ることになります。それは「お市さん」は私の本当の祖母ではなく、その妹に当たる人であることでした。私の直接の祖母は、母姉妹の弟が生まれた時、産後のひだちが悪く死に至り、男の子も生後しばらくして亡くなりました。抗生物質もミルクも無かった昭和初期の田舎のことであり、成す術もなかったと思われます。そしてその妹にあたる「お市さん」が後添えに来たのでした。残念ながら彼女は子どもに恵まれず、近くにいた孫の私をよくかわいがってくれました。また彼女は、姉、甥、孫娘の3人の身内を亡くした経験からか、私の医学部合格を非常に喜んでくれました。ある時、母親が口にした「受験日に神棚にお祈りした」との言葉に、祖母は突然に怒り始めました。祖母は私の合格を1年間毎日祈ってくれており、母親たる者が受験日だけとは何事かということでした。もしかして私が医師になれたのは、祖母の祈りのおかげだったのかもしれませんが。そのような祖母を、医師として一度も診てあげられなかったのは、私にとって非常に残念なことでした。

生前に亡くなっており、私の中にある祖母は「お市さん」だけです。彼女は傾国の美女ではありませんでしたが、小柄で笑顔がとてもチャーミングな人でした。私のチャーミングさはその血を引いているからではないでしょうか。

「お市さん」の家は田舎の貧しい漁師でした。彼女は明治の女性として舅、姑、夫に尽くす中で、苦しい家計をやり繰りして、二人の娘を高等女子師範学校まで通わせました。二人の娘が教師になれたのは、祖母の力があつたからだと思います。

小学校の頃、夕方になると祖母と一緒に、港に祖父を迎えに行きました。沖には、多くの伝馬船が帆に風を受けて港を目指して帰って来ていました。危険と隣り合わせの漁師仕事であり、風が強く波が高い日などには、祖母は心配げに沖を見つめていました。そして獲れた魚は漁協で競にかけ、日々の糧を得ていました。祖父はその日取れたフグを船の上で料理し、天日で乾かして持ち帰ってくれるのが常でした。その日干しになったフグの肉は私の好物であり、それを貰うのが祖父を迎えに行く私の目的の一つでもありました。



帰港する漁船

今日、我が子を殺める児童虐待が後を絶ちません。たとえ血の繋がりは無くとも、石井十次の様に愛情を持って育ててくれる人が、真に「お父さん、お母さん」と呼ばれるに相応しい人ではないでしょうか。その意味で、愛情をいっぱい注いでくれた「お市さん」は、間違いなく私の真の祖母です。

聖書は言います「これはあなたの母であり、これはあなたの子です」。クリスチャンは互いを兄弟姉妹と呼び合いますが、それは同じ「父なる神」を持っているからです。マザーテレサは、行き倒れの貧しいヒンドウの人の中にイエスキリストを見たと言います。そしてマザーは「神の愛の下、彼と私とは兄弟である」として、キリストに仕えるごとくに瀕死の彼に仕え、最期を看取りました。

私は患者さんを自分の家族の様に診たいと願いますが、その実践は非常に困難です。願いながらもできない弱い私を支えてくれるものが「聖書の言葉」であり「父なる神」の存在です。クリスチャンの私は、常に愛情を注いでくれている信頼に足る「父」を持てていることに心より感謝しています。

施設長 島田 誠一